

# 難聴・聞き取り困難者をつなぐ「きこえカフェ」の実践

○勝谷紀子  
（北陸学院大学人間総合学部）

佐野智子  
（国際城西大学福祉総合学部）

KEY WORDS: 難聴、聴覚情報処理障害、自助グループ

（目的）

病気や怪我などさまざまな原因で難聴がある人々、聴覚情報処理障害などで言葉の聞き取りに困難がある人々は、日常生活でのコミュニケーションの失敗体験や会話から取り残される経験で孤独感や疎外感を感じることがある（難聴者の心理学的問題を考える会, 2020）。ストレス対処を目的とした 1 度のワークショップ（勝谷, 2019）だけでなく、日頃から定期的に他の難聴者や聞き取り困難者と交流し、つながりを持つ場があることは精神的な健康を未然に防ぐ上でも重要である。

特に、中途失聴者・難聴者協会（各地域により名称が異なる）やろうあ連盟に加盟する団体が主催する交流目的のイベントが盛んでない地域においては、難聴者・聞き取り困難者は孤立しやすい。また、身体障害者手帳を所持していない難聴者や聞き取り困難者にとっては、こうしたイベントは参加への「敷居の高さ」が感じられるかもしれない。

そこで、本報告では、2017 年度より第一報告者が開催し、原稿執筆時点で 14 回実施した交流会「きこえカフェ」の実践について報告する。聞こえにくさ、聞き取りづらさを持つ人びとを対象にした「きこえカフェ」のこれまでの実践をふりかえりながら、難聴・聞き取り困難を持つ当事者が集まって語り合う活動の意義と効用について考える。

（方法）

**「きこえカフェ」の概要** 大きなねらいは、「聞こえづらさを持つ人びとと士気持ちや知恵を共有する」ことである。各回ごとにテーマを設け、テーマに関する話し合いや情報交換、意見交換を行っている。

**参加者** 参加者の居住地、難聴の程度・原因、年齢、身体障害者手帳の有無に関わらず難聴・聞き取り困難があれば誰でも参加可としている。難聴・聞き取り困難に関心を持つ健聴者、家族に該当者がいる健聴者も参加した。

**開催の形態** 14 回の開催のうち、第 1 回から第 4 回は貸し会議室での対面での開催、第 5 回と第 9 回以降はビデオ会議システム ZOOM を用いての開催、第 6 回と第 7 回は貸し会議室とビデオ会議システム ZOOM を併用しての開催であった。

**「きこえカフェ」の構成** 会合の時間はいずれも途中の休憩をはさみ 2 時間であった。構成は回ごとで異なっている。第 1 回～第 4 回はワールドカフェ形式を採用し、グループに分かれての話し合いをおこなった。また、第 3 回、第 6 回、第 7 回は PCAGIP（ピカジップ）形式（村山・中田, 2012）を採用し、テーマに関するエピソードを各自が紹介した後、参加者の 1-2 名が発表者となり質疑をしながらくわしく掘り下げていく形式で実施した回もあった。第 8 回ではオンラインツールの miro を用いた。第 5 回、第 9 回以降は ZOOM にて参加者の話をひとりずつ、あるいは（時間がある回では）グループに分かれての会話も行った。

**参加者への調査** 「きこえカフェ」に参加者に対しては、会合後に任意で参加者アンケートへの回答を求めている。質問項目は、きこえカフェに参加した際に感じた印象、開催についての評価（時間、内容、進行）、テーマについて、会合についての要望などであった。対面での開催時では紙

の調査用紙を渡して回答を求め、オンラインでの開催時では Google フォームへのアクセスと回答を求めた。

（結果と考察）

これまでの「きこえカフェ」のテーマは表 1 のとおりであった。難聴・聞き取り困難者の関心が高いと思われるコミュニケーション、補聴機器、医療に関するテーマのほか、新型コロナウイルス感染対策のための「新しい生活様式」に関するテーマを設定した。今後は就労や学業など参加者の属性やニーズに応じて幅広く設定する必要がある。

表 1 「きこえカフェ」のテーマ

テーマの内容
自分の聞こえ方・聞こえにくさを表現する、ふだんのコミュニケーションの工夫について話し合う、コミュニケーションを「研究」する、聞こえの困りごとを「研究」する、コミュニケーションの工夫、最近の近況報告、自粛生活の過ごし方、補聴器・人工内耳、新しい生活様式、新しい生活様式（真夏編）、新しい生活様式での過ごし方の工夫、2020 年をふりかえって、コミュニケーションの工夫、フリー（参加者同士で聞いてみたいことをお互い聞きあう形）、聞こえのための健康・医療情報、医療機関の選び方・かかり方

各会合後の参加者アンケートに関して、ここでは「コミュニケーションの工夫」をテーマとした第 1 1 回での結果を紹介する。時間については「適切」が最も多く（55.6%）、テーマは「とても良い」（66.7%）が最も多かった。進行・運営については「とても良い」（66.7%）と続いた。

また、テーマの「コミュニケーションの工夫」について自身の工夫について尋ねたところ、「人工内耳を見せる」「ロジャーなどのワイヤレス機器を活用」「復唱するときは身ぶり手振りを使って確認」などといった回答が得られた。

こうしたアンケートの回答は報告書としてまとめて参加者に後日送付している。それによって、各テーマについて客観的に考えることができる、問題への対処法が増える、自分の問題のふりかえりができる、同じ難聴者と意見や情報が共有できるといった効果が期待されると考えている。

今後の課題としては、各回の発話内容を詳細に分析したり、複数回参加している参加者への聞き取り調査を行うなどして「きこえカフェ」の効果について実証的な検討を行う必要がある。

※本研究は、科研費 19K02219 の助成を受けたものである。

（文献）

難聴者の心理学的問題を考える会（編）（2020）難聴者と中途失聴者の心理学—聞こえにくさをかかえて生きる—かもがわ出版

勝谷紀子（2019）難聴者が自身の難聴およびストレスについて理解を深めるためのプログラム作成の試み：ストレス対処ワークショップ 特殊教育学研究 第 56 巻 第 5 号 306-314.

村山正治・中田行重（2012）新しい事例検討法 PCAGIP 入門:パーソン・センタード・アプローチの視点から 創元社

（KATSUYA Noriko, SANO Tomoko）